

自殺に

たどり着くまでの

道のり

パチンコ依存症克服

吉田そら





# 目次

自殺にたどり着くまでの道のり . . . . .	1
第一章 気持ち	
軽い気持ち . . . . .	4
第二章 違和感	
違和感 . . . . .	8
第三章 金銭感覚	
金銭感覚 . . . . .	12
第四章 ストレス	
ストレス . . . . .	16
第五章 借金	
借金 . . . . .	20
第六章 究極の裏切り	
究極の裏切り . . . . .	24
第七章 新たなる生活	
新たなる生活 . . . . .	32
第八章 犯罪	
犯罪 . . . . .	36
第九章 パチンコ依存症	
パチンコ依存症 . . . . .	40
第十章 止まったままの成長	
止まったままの成長 . . . . .	46
第十一章 刺激を求めて	
刺激を求めて . . . . .	50
第十二章 やる気	
やる気 . . . . .	54

第十三章 自殺	
自殺 . . . . .	58
第十四章 抜け出せないトンネル	
抜け出せないトンネル . . . . .	62
最終章 パチンコ依存症克服	
パチンコ依存症克服 . . . . .	66

## 自殺にたどり着くまでの道のり

私は世の中のすべてが嫌になり自殺を実行した。

元をたどればすべて私が原因だった。

そして、人を嫌いになり、自分を嫌いになり、仕事を嫌いになり、生きる希望を失ったときにこの感情が芽生え始めた。

もう何も考えたくない。

自殺したい。

生きるのに疲れた。

結局自分が生きていた中で残せたもの、借金以外に何も無い。

私には何も残っていない。

私は何も残せていないのだ。

でも、もういいや。

これ以上生きていたくない。

早く死んで楽になりたい。

この物語は、私が自殺にたどり着くまでの話になります。



## 第一章 気持ち

## 軽い気持ち

話は今から三十年前に遡ります。

私が高校に入学して友達が出来始めてきた頃、私の人生は少しずつ傾き始めた。

その頃、私のクラスでは一部の人間で流行りだしていたものがあった。

それは、パチンコである。

私はパチンコをやったことがなかったため、その話についていくことが出来なかったが、私の中でパチンコのイメージは最初から良いものではないと身についていた。

それは私の親戚の叔父が根っからのパチンコ好きで、暇を見つけては家庭を顧みずパチンコを打ちに行っていたということを、私の親から聞いていたからである。

その叔父はパチンコで借金をし、そのことで家庭では喧嘩が絶えなかったということ、それを昔から何度も繰り返してきたということ、結果的にその話のせいで私にとってパチンコは良いイメージではなかったのです。

けれども、心のどこかでパチンコを打ってみたいという好奇心はあった。

そんなある日、友達が私にこんな話をしてきた。

その話とは、昨日パチンコで大勝した話だ。

友達は、たった二時間で六万円も勝ったという。

その前の日は二万円、その前の日は五千円とずっと勝っているというのだ。

私は、そんな勝てるものなのかと半信半疑で聞いていると、その友達が財布の中身を私に見せてきた。

その財布の中には、二十万円以上のお金が入っていた。

すべてパチンコで儲けたお金だという。

そして、友達は私にこう言った。

今度パチンコを教えてあげるから一緒に打ちに行かない、楽しくて儲けられるよとの話だった。

その時私は、俺はやらないと断った。

その理由が、やっぱり親戚の叔父の話を身近で聞いていたのが大きかったのだと思います。

私は、しばらくして近所のスーパーでバイトを始めることにした。

それは、バイクの免許を取得するために貯金をしたかったから。

バイクの免許を取得できる年齢は、十六歳。

それまでに、教習所に通い免許を取得すると同時にバイクを買いたかった。

その為には、働くしかないと思った。

私は、学校帰りにバイト先によって一日三時間、週に四日バイトに励みお金を貯めた。

そこで知り合ったバイト先の先輩と仲良くなり、バイト先の先輩が私にこんな話をするようになった。

最近パチンコの調子が良くてずっと勝っているとの話で、今度一緒に行ってみないかとの話だった。

私はパチンコには興味がなかったため、その話は流して聞いていたのですが、一度話を聞くと毎日パチンコの話をしてきた。

楽しいよ、楽しいよと。

私はそんなにパチンコが楽しいのか不思議に感じた。

学校でもパチンコの話、バイト先でもパチンコの話、だんだん自分も一回くらいだったら行ってみたいかなって気持ちになった。

数日後バイト先の先輩がパチンコの話をしていた時に、今度自分もパチンコに連れて行ってほしいと話した。

先輩は嬉しそうに、いいよって答えました。

それから数日たって、私は先輩とパチンコに行くことになった。

私のこの先の人生、この好奇心から始めたパチンコでここまで狂ってしまうなんて。

そして、自殺に追い込まれるなんて、その時は知る由もなかったのです。



## 第二章 違和感

## 違和感

私は、先輩と初めてパチンコに行くことになりました。

パチンコ店に入って最初に私が思ったこと、それは今まで生きていた中で感じたことのない独特の雰囲気でした。

それは、店内に入った瞬間から耳を塞ぎたくなるような爆音。

大の大人が、椅子に座りひたすら画面を見続ける異様さ。

台を叩いている人もいれば、台を撫でている人もいる。

貧乏ゆすりをしている人もいる。

なんて落ち着きがないのかと不思議に感じたのです。

これらすべてが私にとって初めての光景だったため、これがパチンコなのかと思いました。

何もわからなかった私は、先輩に打つ台を決めてもらいそれを打つことにした。

まず最初に、千円を両替をして百円を十枚にしてから始まったのです。

先輩に選んでもらった台というのは羽根物と言って、一に入ったら羽根が一回開く、二に入ったら羽根が二回開く台でした。

その羽根が開いたときに、玉を拾って中心にある V ゾーンという穴に落ちたら大当たりという仕組みの台でした。

お金を入れて玉を借り、その玉をハンドルを握って打つ。

先輩にこの辺りの釘を狙って打てと教わり、その通りに打ってみたのです。

一に入って一回開く。

そして、羽根が玉を拾って V ゾーンへ入ったら大当たり。

なんとなく意味が分かってきた。

千円があっという間になくなり、また千円を両替。

なんてお金が無くなるのが早いのか、一時間バイトをしても千円にはならない。

私は、お金が勿体ないとその時は思ったのです。

しばらくしてから V ゾーンに玉が入り、私に待望の大当たりがスタートした。

静かだった台から音楽が流れ、大当たりをしたと実感が湧いた。

私はドキドキした。

先輩に横についてもらい、大当たりの消化の仕方を教えてもらう。

台から玉がジャラジャラ出てくる。

受け皿から球を箱に移す。

さっき使った玉が倍以上になって戻ってきた。  
私はこの時、楽しいと思った。  
それを繰り返していると、あっという間に箱が満タンになり、打ち止めになった。  
その間、ずっと私はドキドキしていた。  
そして先輩に両替の仕方を教わり、換金してみるとプラス五千円になっていた。  
私はその時思ったことがある。  
こんなに簡単にお金を稼げてしまうのかって、これがパチンコかって。  
そして、先輩が私にこう言った。  
素質あるんじゃないって。  
私は次の日、友人とパチンコの話をした。  
友人は驚く素振りもなく、ねっ楽しいでしょって今度みんなで打ちに行こうと約束をした。

パチンコというのは、この普段では味わえない独特の雰囲気というものが曲者で、最初は違和感から始まり、それが普通に感じられるようになると身体は不思議とパチンコに慣れてくる。

しばらくして学校の友人とも、そして一人でもパチンコに行くようになった。  
羽根物しかやったことがなかった私が、台が空いていなかったことが理由で打ったこともない台をやることにしたのです。  
その台が、フィーバー台といって数字が揃うと大当たりという台だった。  
そのフィーバー台の島は、羽根物台の島に比べて明らかに出玉が多く積まれていた。  
もちろん初めて打つ台なので、訳もわからず隣の人の真似をして真ん中のへそを狙う。  
そこに玉が入るとデジタルが回る。  
いつもやっている羽根物に比べてお金の使い方が早く、最初はあまり楽しいという記憶はなかった。  
しばらく打っていると、リーチがきてそして外れる。  
それを何度も繰り返して、結局二万円負けてしまった。  
何が何だかわからなかった。  
二万円と言えば、二週間分のバイト代に匹敵する。  
そのお金を、ほんの数時間で失ってしまったのである。  
お金が無くなったこともあり、その日はそれで帰った。  
家に帰ってからも悔しくて、イライラして何をやっているのだと自分を責め続けた。  
私はあまりの悔しさに、次の日バイトを休んで打ちに行くことにしたのです。  
その日は、昨日よりも多くお金を持っていきその台を打ち始めた。  
昨日とは違い、今日は当たるまで打ってやると意気込み、リーチがきたら、当たれ、当たれと台を睨みつけお金を投資していった。  
しばらく打っていると、待望の大当たりが私にやってきたのだ。

よっしゃー。

その当たりが、なんと七連チャン、そしてしばらくするとまた当たる。  
その当たりが四連チャンと続き、気がつけば私の椅子の後ろに十箱以上の出玉があった。  
いつもは羽根物を打っていただけに、こんなに出したのは初めてのことだった。

出ている間、私はずっとドキドキしていた。  
換金してみると。  
昨日の負け分を取り返し、さらにプラス四万円。  
私が最初にパチンコをしたときの違和感は、この時にはすでになくなっていたのです。  
あの耳を塞ぎたくなるような爆音が当たり前のようになってくる。  
大の大人が真剣な眼差しでひたすら台を見続ける異常さ、きっと私もそうになっていたに  
違いない。  
大切なお金を投入しているので、真剣になるのは当然のことだった。  
今の私ならわかる。  
本来最も気が付かなければいけない違和感、それは二万、三万という大金がほんの数時  
間の間に、出たり入ったりしてしまうパチンコの異常性、これを毎日繰り返してしまっ  
たら本来の金銭感覚がマヒしてしまう。  
この違和感に気が付くかどうか、私のこの先の人生を左右する大きな分岐点であった  
こと。  
その時の私はそんなこと考えもしなかった。

### 第三章 金錢感覺

## 金銭感覚

以前に増して、私の高校生活はパチンコに行くことが増えました。  
この時の私は、パチンコが唯一の生き甲斐になっていたといっても過言じゃない。  
パチンコが楽しくてしょうがない、バイトがないときは私服をカバンに詰めてパチンコ屋に直行するのは当たり前。  
私の高校生活はパチンコ中心に動いていた。  
学校でも相変わらず友人との会話は、パチンコの話である。  
昨日は一万勝った、昨日は二万負けた、あの台は爆発力がある、あの店が出る、あの店が出ない、明日はあの店が新装開店だから打ちに行かないかと。  
今考えると、これは高校生の会話ではない。  
何故みんな、そんなお金があるのか？  
それは、みんなそれぞれバイトをしていたからである。

けれども、本来高校生というのは学業や部活に専念するもの、こんなことをしていたら進学はおろか就職すら困難になる。  
そして、学校の成績はみるみる落ちていった。  
けれどもパチンコが楽しい、あの勝ったり負けたりする興奮が忘れられない。  
私の頭の中は、パチンコでいっぱいだった。  
そして、本来の使い道であるバイトの給料。  
バイクの免許を取得するための貯金だったが、それがいつからかパチンコをするためのお金になっていった。  
貯金は、みるみる無くなっていく。  
当然と言えば当然である。  
私がやっているのは、本来お金のない高校生がやっていい遊びではない。  
決して、はまってはいけないお金を失うゲーム。  
さすがに貯金がなくなったらパチンコは出来なくなりしばらくはパチンコを打てない期間はあったが、バイトの給料が入ったらパチンコ、給料が入ったらパチンコの繰り返しになっていった。  
その時の私は、バイトをしてお金を貯めてバイクの免許を取得するという目標もなくなっていた。

そんなある日、お金がなく家でじっとしていた時のことだった。

お腹がすき何か食べ物はないかと探しているときに、何気なく引き出しを開けてみると、そこにはお金の入った封筒があった。

数えてみると、三十万くらい入っていた。

それを見たとき、私の中で急にパチンコがやりたい欲求が襲ってきたのである。

これでパチンコが出来る、けれどこのお金はまずいだろう、数分悩んだ挙句、勝って返せばいいと都合のいい考えになった。

散々パチンコで負けている私が、パチンコで勝って返せるはずがない。

何度も言うようだが、パチンコはお金を失うゲームなのだ。

封筒から五万円を抜き取り、私はご飯も食べずにパチンコ屋へ向かった。

いつものように、フィーバー台の席に座りお金を投入しながら台を睨みつけハンドルを握った。

当たれ、当たれ、リーチはくるもののこんな時は当たらないものである。

この台はダメだ。

台を替え再び現金を投入。

けれども、まったく当たらない。

ふと辺りを見回してみると、最初にやっていた私の台が当たりを引いていた。

やっぱりあの台だったか。

私は台をさらに替え現金を投入。

私はその時焦っていた。

持ってきた五万円がなくなるからである。

当たってくれ頼む、もうお金がない。

そんな願いもかなわず、私は持ってきたお金を全て擦ってしまった。

ほんの数時間で、五万円を擦ってしまう。

私の金銭感覚はこの時すでに完全に崩壊していたのだ。

そして家に帰る途中、私はこう思った。

どうしよう、親に怒られる。

私はびくびくしながら家に帰った。

家に帰ってみると、親は私に対して普通に接した。

私はまだばれていないのかと思い、ご飯を食べて自分の部屋に戻った。

数日後、お金がなくなっていることに気がついた親が私を呼び出した。

五万円返しなさい。

私がお金を取ったと、決めつけている。

それもそのはず、この家には私以外にお金を取る人がいなかったからだ。

最初は知らないと言いながら問い詰められ、私がお金を取ったことを白状した。

親は私に何に使ったのか聞いてきた。

私はとっさに、友達から預かっていたお金を落としたと嘘をついた。

この数日間、私はいつ親にばれるのかとびくびくして生きた心地がしなかった。

そこから月日がたち、私は学校を卒業することになった。

進学を諦め、就職することとなる。

就職先は、パティシエである父の紹介で都内のケーキ屋に勤めることになった。  
今思い返すと、私の高校生活、私はいったい何をやる事が出来たのだろうか？  
この高校三年間、私はもっとたくさんのお金を学ばなければいけなかった。  
考えてみると、学校に行ってバイトをしてパチンコに行く。  
ずっと、これの繰り返しだったのではないか。  
結局バイクの免許も取れず、車の免許は親に出してもらい、自分で何かやる事が出来たという達成感なんて一つもない。  
さらに、私はこの高校生活を生きていく中で最も大切なものを失ってしまった。  
それは、金銭感覚である。  
本来お金というものは、大切に使うべきではない。  
ほんの数時間で、二万円、三万円、そのお金でいったいどれだけの事が出来るのか？  
私は、いったい何のためにバイトをしていたのか？  
パチンコをするということ、それは私にとってお金を減らすためにしていたことになってしまった。  
昨日はお金があったのに、今日はお金がない。  
パチンコをやっていたら、それが当たり前になってしまう。  
数万円を数時間でなくす。  
これをお金の価値を知らない高校生が経験してしまったら、いったいどうなるのか？  
これから、私は社会人になっていく。  
私はこれからどんどん泥沼に陥り、地獄を見せられることになる。

## 第四章 ストレス

## ストレス

私は社会人になった。  
仕事はパティシエである。  
朝五時半に起きて、八時に出社。  
帰りはいつも夜の九時頃になる。  
実家からバスと電車を乗り継ぎ二時間かけて職場へ向かう。  
電車通勤は今までしたことがなかったため、会社に着くまでに体がぐったりしていた。

会社につき着替えたら、直ぐに生地 of 仕込みに入りそれを釜に入れて焼き入れる。  
大量生産により、失敗は許されない。  
気を抜いたら焼き物が台無しになってしまう。  
とても神経を使う仕事だった。  
仕込みは次から次へと続く、途中休む時間がない。  
唯一の休憩、それが昼休み一時間。  
この時間は、私にとってご飯を食べて一息つく時間に過ぎない。  
なぜなら、この休憩している間でも焼き物は釜に入っている。  
休憩途中でも、釜から焼き物を出さなければいけないのだ。  
これは、新米である私の仕事なのだ。  
午後三時ごろから、昼間焼いていたものをカットしたり、包んだり、まだまだ仕事は続く。  
仕事が終わる会社を出るのが夜の七時ごろ、疲れた体を電車で揺られながら帰宅する。  
私の休憩は、この電車の中なのではないかと錯覚してしまうくらい、帰りの電車が心地よかった。  
一ヶ月が経ち、待ちに待った給料日。  
給料は、たったの十三万円だった。  
この給料から家に三万円渡して、私の使えるお金は月に十万円。  
私はお酒も煙草もやっていたこともあり、自由に使えるお金は月に五万円にも満たなかった。  
こんな新米の私でも、もちろん休みはある。  
それは水曜日。

休みの前の日になると、朝から体がうずうずしていた。  
それは、明日パチンコが打てるからである。  
私は、社会人になってもパチンコを止めてはいなかったのだ。  
この頃私の楽しみは、休みの日に朝からパチンコを打つこと。  
パチンコを打つことにより、ストレス発散ができると思い込んでいたのである。  
給料をもらった最初の休み、私はいつもより意気込んでいた。  
使えるお金すべてを財布に入れ、必ず勝つと自分に気合を入れ朝からパチンコ屋に並ぶ。  
開店と同時に軍艦マーチが鳴り響き、客は一斉に店内を走り、台を確保に向かう。  
今では想像がつかないかもしれない。  
けれども二十年以上前は、パチンコ人数三千万人、今の時代が約一千万人としたら今の三倍以上にものぼる。  
パチンコは日本には欠かすことのできない遊技場だったのだ。

最初は羽根物、調子が悪いとフィーバー台へと台を移動する。  
運が良ければ勝つこともあるが、運が悪いと財布の中身がスッカランになることもある。  
私は何度も言う、パチンコはお金を失くすゲームなのだ。  
負けるときの方が圧倒的に多い。  
全部お金を擦ってしまった、そんな時は自分を抑えつけるのに苦労する。  
もちろんそこには、お酒代、煙草代も含まれる。  
そのお金もすべて私の中では、使えるお金に入っているのである。  
明日も朝から仕事、お金もない、負けたことで自分を責める。  
イライラしてどうしようもない、当たり前である。  
それよりも、残り一ヶ月どうやって生活していけばいいのか。  
そんな時は、親にお金を借りる。  
五千円借り、そのお金で食費を削り、煙草の本数を減らし二週間耐えしのぐ。  
なくなったらまた五千円借りる。  
数時間で何万もパチンコでお金をなくすくせに、私にとってお金がないときの千円は大金なのである。  
まさにこれがギャンブラーである。  
パチンコをしない人から見たら、ただの馬鹿にしか映らないだろう。  
仕事を初めてちょうど二年、いつも同じようなパターンの生活になっていた。  
そして親は、いつも私にこう言っていた。  
お金は使ったら無くなるもの、大事に使いなさいとそんなこと言われなくてもわかっていた。  
親は私に、何にお金を使ったのかは聞いてこなかった。  
親は知っていたのである。  
私が休みの日に、朝からパチンコに行っていたことを。  
ただ、お金があるとパチンコに行きたくってしまう。  
どうしても自分を抑えることが出来ないのだ。

仕事が休みの日、お金がないと、私は家の中でお金を探し始めるようになっていた。  
私はじっとしていることが出来なかったのだ。  
お金を見つけて、ストレスを発散しにパチンコに行きたくてしょうがなくなる。  
どこかにお金がないのか、タンス、戸棚、押し入れ、私はとにかくお金を探す。  
パチンコへ行きたい。  
給料日はまだまだ先である。  
とても我慢できる状態ではない。  
お金、お金、お金、そんな時お金を見つけた場合、私は大喜びする。  
このお金でパチンコが出来る。  
でももし負けたらどうするのだ。  
頭の中で多少格闘はするが、必ず最終的にはパチンコへ行ってしまふ。  
勝てばいい、借りるだけなら問題ない。  
はっきり言って、ただの泥棒である。  
正真正銘、立派な犯罪である。  
そのお金を持ってパチンコへ一目散に行き、そしてそのお金をすべてなくしてくる。  
そしてあとは、いつものように後悔する。  
何をしているのだと自分を責め始めるのだ。  
いつもこの繰り返しだった。  
家に帰り、あとはびくびくしながら親にばれるのを待っている。  
こんなことを繰り返していたら、さすがに親もバカではない。  
お金を一切家に置くことはなくなった。

私にとってストレス解消とは、パチンコに行くこと。  
けれども、パチンコへ行くと負けて帰ることが圧倒的に多い。  
かえってパチンコをすることで、ストレスを溜めているということ。  
私はこの時は気づきもしなかった。

## 第五章 借金

## 借金

今の仕事に就き、三年目に差し掛かろうとしていた頃、私は二十歳になっていた。その頃お店で働いていた女性と、意気投合しお付き合いすることとなる。お互い仕事でのストレスを抱えていることにより、同じ悩みを共有しお互いに助け合いながら頑張っていたことで恋愛感情が生まれたのだ。相手の女性は、とても清楚で綺麗な女性だった。お店の休みが水曜日なため、休みにはデートをして、休みの前日には一緒に飲みに行くようになった。飲みに行くときはいつも割り勘で、私に負担をかけさせないようにする心遣い。デートでは、私より彼女の方が支払っていたのではないかと思わせるほど出してくれた。私は幸せだった。けれども、私は相変わらずパチンコから離れることが出来ないままだった。休みの日彼女と別れた後、帰りにそのままパチンコへ行きそして閉店まで打つ。明日が仕事だとしても、お金と時間が許す限り私はパチンコをやり続けた。こんな生活をしていたら、私の給料ではお金が持つわけもない。私は借金をしていたのだ。この頃、二十歳で仕事をしていれば誰でも貸してもらえる消費者金融である。簡単に借りられる分、私みたいなパチンコをやる人間にとってはリスクも大きい。パチンコをすることによって、理性を失い歯止めが利かなくなるからである。彼女とのお付き合いだけなら借金なんてする必要はまったくなかったが、私はパチンコをやっている。パチンコをするお金が欲しかったのだ。最初だけ借金をするのに抵抗があったが、ちょっとだけと十万円から借金がスタートした。私は勝って返せばいいと思っていたのだ。十万円が二十万円、二十万円が三十万円と借金がみるみる増えていく。限度額を五十万円までにしてもらうのに半年とかからなかった。返済は月に二万円。利息だけでも馬鹿にならない金額になっていたが、私はそれほど気にしてはいなかった。この期に及んで、私はまだパチンコの調子が良ければ返せると思っていたからである。実際、一日に十万円以上勝った日が何回かあったからだ。借金をすることで、私はパチンコに対する執念がどんどんエスカレートしていった。

仕事中でもパチンコのことを考え、焼き物を焦がしよく叱られるようになった。  
それが私にとってストレスとなり、平日でも帰りにパチンコに行くようになった。  
そしてパチンコ屋に行く回数に比例して、借金は増えていった。

これ以上限度額を上げることが出来なくなり、私はもう一枚カードを作ることにした。  
この生活を繰り返していると、当然借金も増えていく。

まさに泥沼である。

新しく作ったカードもほんの数か月で限度額が一杯になってしまった。

更にもう一枚カードを作り、借金が百五十万、そしてついにどこからも私にお金を貸してくれるところはなくなった。

そうなる大変なのが、利息の返済である。

利息だけでも月に四万円以上、元金はまったく減らないのだ。

私はこの時、彼女からもお金を借りるようになっていた。

一度借りると、何度も何度も借りた。

しかも彼女とのデートはもちろん、ご飯も飲み代もすべて出してもらっていた。

私は切り詰めて生活しなければいけない立場。

けれどもパチンコは止めなかった。

そんなある日、私にとってある事件が起きた。

それは、彼女からの突然の別れ話である。

多分こんな私に愛想が尽きたのであろう。

そりゃそうである。

この時には、彼女から借りている借金は五十万円を超えていたのだ。

しかも一度も返済していないときてる。

私は、彼女に必死に頭を下げた。

私が頭を下げたことにより、彼女は心を打たれたのかどうかはわからない。

けれども何とか今回は寄りを戻すことができたのである。

だがこのままいって、次があるかどうかわからない。

私は借金を何とかするために、親に相談することにした。

私は素直にパチンコで借金をしたことを話すことにした。

親は呆れた感じで、もう二度とパチンコはやらないと念書を私に書かせ、今回だけということで消費者金融、彼女への借金を立て替えてくれることになった。

私は、念書には書いたけれどパチンコを止める気などさらさらなかった。

むしろ、借金がなくなったおかげで気持ちが楽になり、次の日にはパチンコ台の前に立っていたのである。

そのせいで相変わらず私の生活が苦しかった。

だがその時の私は、生活が苦しいのはこの仕事をしているせいであり、もっと給料のいいところに転職すればこの苦しい生活から逃れられると思っていたのである。

彼女に話をして、私が転職したらお金を貯めて一緒に住んでほしいと話した。

彼女は私の話を了解してくれた。

そして次の月、私は会社をあっさり辞めたのであった。



## 第六章 究極の裏切り

## 究極の裏切り

ケーキ屋を辞めた私が次に選んだ仕事は、倉庫の仕事だった。  
私の友達がその倉庫で働いていたことが理由でその職場に決めたのだ。  
仕事内容は、主に倉庫の在庫管理がメインである。  
給料は時給制で、休みが日曜日。  
朝八時から夕方五時まで、残業はたまにある程度だ。  
朝七時に起きて、家からバスに乗り三十分ほどで職場まで着く。  
ケーキ屋で働いていた時に比べて遥かに体が楽に感じた。  
働き始めて一ヶ月が過ぎ、待ちに待った給料日。  
給料は、今は珍しい手渡しだった。  
給料袋を開けてみると、約二十万円のお金が入っていた。  
そこから振り分けである。  
まず始めに家に二万円入れ、そして引越し資金として三万円彼女に預けた。  
残り十五万弱は、私が自由に使えるお金になる。  
もちろん仕事を変えてもパチンコをやっていたため、毎月全部使うことになる。  
この仕事を紹介してくれた友達は、もともと私のパチンコ仲間である。  
仕事が終わりに、帰りによく二人でパチンコを打ちに行った。  
勝ったらそのまま二人で居酒屋に飲みに行き、家に帰るのは日付が変わることがよくあった。  
彼女との休みが違うため、彼女と会う日は水曜日の夜だけになった。  
日曜日は私の自由に使える時間になったことで、私は心置きなくパチンコができた。  
もちろん家族には内緒でだ。  
この頃は、パチンコよりスロットの方がメインとなり、私は勝つために雑誌を買って研究をするようになったが、所詮ギャンブルである。  
そう都合よく勝てるわけもなく、お金はどんどん吸い取られた。  
ケーキ屋の時と同じように、生活は常に苦しいままだった。  
毎月のように生活費が足らなくなる。  
その時は、いつものように親に泣きつくのだ。  
それがダメなら彼女から引越し資金として貯めているお金を借りる。  
職場を移動して二年が過ぎようとしていた頃、ようやく引越し資金が貯まった。  
部屋を探し、私の職場から一時間以内の場所に引越しをした。

私の金遣いの荒さは、自分が一番わかっている。  
だから給料を全て彼女に預けて、生活費を管理してもらうことにしたのだ。

月の小遣いが五万円、そこから煙草を買い四万円くらいになる。  
パチンコをする私にとってお金が足りるわけもなく、必ず追加でお金をもらっていた。  
そう考えると、月に十三万円くらいもらっていたであろう。  
私は以前のように仕事の帰りにパチンコへ行っていたこともあり、帰りがいつも夜の十時を回っていた。  
もちろん彼女には残業だと嘘をついていた。  
彼女は寝る支度をして毎晩私のことを待っているけれど、私の帰りは遅い。  
いつもご飯は別々で食べていた。  
私は冷めたおかずを電子レンジで温めて、一人で食べる。  
私がお飯を食べ終わる頃には、彼女は寝ている。  
時には友達と飲んで帰ることもあり、帰ってくると日付が変わっている始末。  
彼女にとって私との生活は楽しいものではなかったであろう。  
いつもすれ違いの毎日、ただの同居人にすぎないのではないか。  
少しでも彼女のことをわかってあげられていれば、またこの先の人生がお互いに変わっていたのではないかと考えさせられるものがある。

同棲を初めて一年が経った頃、その月はパチンコの調子がいつもより悪かった。  
彼女から生活費をもらった次の日にはお金がなくなっていた。  
さすがに彼女にお金の催促はできず、私はまたもや消費者金融に手を出すことになる。  
パチンコで勝って返せばいいと都合のいいように考え、十万円、二十万円と自分のお金のように借りていった。  
半年もしないうちに五十万円の借金になり、さらにそこから一年がたつ頃にはカードは三枚に増え、借金は二百万円を超えていた。  
私のお小遣いでは利息すら返すことは出来ない。  
また以前と同じことを繰り返してしまったのだ。  
いったいどうしたらいいのか途方に暮れていた頃、私の友人がある提案を出してくれたのだ。  
それは、弁護士に頼んで債務整理をするということだった。  
私の友人も借金があったということで、二人で弁護士に債務整理を頼むことにした。  
私が頼んだ債務整理とは任意整理のことで、弁護士に報酬を渡す代わりに、私と消費者金融の間に弁護士に入ってもらい、利息を免除して元金だけ払うというものだった。  
月の返済は六万円。私のお小遣いではどうすることもできなくなり、彼女に相談した。  
彼女は黙って、私の話を聞いていた。  
もちろん私はパチンコで借金を作ったとは言わず、友達のを借りて事故を起こし、相手方への支払いとして借金をしたということにした。  
彼女はわかったと一言だけ言って、その日はそのまま寝てしまった。

彼女も話す気力がなくなっていたのであろう。  
さすがに、私も今回のことで心に誓ったことがある。  
それは、パチンコを止めなければいけないということ。  
それに自分でもわかっていたのだ、パチンコは勝てないようにできているということ。  
私はいったいパチンコで今までいくらお金を失ってきたのか。  
私は心を入れ替え、必ずパチンコを止めてやるとその時決意したのであった。

次の日から、仕事が終わったらまっすぐに家に帰るようになった。  
毎晩帰りが遅かった私が、夕方の六時に帰宅する。  
今度は逆に、私が彼女の帰りを待つようになったのだ。  
彼女が家に帰ってきたときに、彼女は私にこう言った。  
今日は帰り早かったんだねと。  
次の日も、また次の日も、私は彼女より早く帰宅している。  
彼女の対応はあっさりしていた。  
私はふと思ったことがあった。  
しばらく彼女の笑顔を私は見ていなかったことに。  
私が早く帰ってきているのに、嬉しくはないのかと疑問に思った。  
今考えてみると、当然なのだ。  
一緒に住み始めてからずっとすれ違い、会話だってろくにしていなかった。  
彼女だって私に話したいことがたくさんあったはず、けれども私はパチンコで帰りが遅い。  
話したいときに、私はいつもそばに居なかったのだ。  
そんなことも知らず、私はその彼女の対応にイライラが募り始めていった。  
イライラ、イライラ。ストレス発散にパチンコに行きたい。  
明日は日曜日、仕事が休み。  
パチンコへ行きたい、でもお金がない。  
この時私がお金を使い過ぎないように、お小遣いを日払いでもらっていた。  
一日、二千円である。  
なので、私にはパチンコに行けるほどのお金がない。  
私は、債務整理をしていたことでこれ以上借金もできない。  
けれども明日、どうしてもパチンコへ行きたい。  
彼女が仕事に向かったことを確認すると、私は家の中を探し始めた。  
お金、お金、けれどもお金がどこにもない。  
パチンコをやりたくて自分を抑えきれない。  
そんな時、押し入れの奥でブランド物のバックを見つけたのだ。  
これでパチンコが出来る。  
朝食をとり、時間がきたら私はバックを持って質屋に走った。  
この時の私には、それが彼女の大切にしていたバックだとしてもまったく迷いはなかった。  
とにかくお金を作ってパチンコへ行きたかったからだ。

質屋に持っていったら七万円になった。  
そのお金を握りしめ、私は開店と同時にパチンコ屋に走った。  
パチンコを止める決意をして、ちょうど二週間目のことだった。  
あんなにイライラしていた私が、打ち始めた途端に嘘のようにイライラが治まった。  
その日の私は、今までにないくらい絶好調で、トータル二十万円勝ちの大勝利を収めたのだ。  
帰りに質屋によってバックを取り返し、元あった場所にバックを戻した。  
財布の中には二十万円、私は嬉しくてしょうがなかった。  
そして、次の日からまた仕事帰りにパチンコに行き、帰りが十時を過ぎることになる。  
また以前の生活に戻ってしまったのだ。  
家に帰ると、彼女は寝る準備をしている。  
私は、ご飯を電子レンジで温めて一人で食べた。  
けれどもそんな生活も一ヶ月も持たないまま、その時に勝ったお金はなくなった。  
彼女との生活は相変わらず冷えきっている。  
彼女は私に対して、まったく無関心なのである。  
私は不満を抱えていた。  
さらに私はお金がないことでストレスが溜まり、爆発しそうになっていた。  
お金がなくて、イライラする。  
私は自分自身を抑えることが出来なくなっていたのだ。  
平日仕事から帰り、そのイライラを抑えるためにバックを持って質屋に走った。  
前回と同じで七万円であった。  
私はそのお金を握りしめ、必ず勝つと自分を奮い立たせ再度パチンコへ向かった。  
世の中そんなに甘くはない。  
しかも、私がやっているのはパチンコである。  
そううまく具合に勝てるわけもなく、私は四万円失った。  
次の日、残りのお金を持って再びパチンコへ行った。  
結果は全てのお金を失うという惨敗である。  
私は、その時に我に返ることになる。  
まずい、どうしようと。  
私は後悔した。  
家に帰ると、バックがないことに気づいた彼女が怒り出すのではないかとびくびくした。  
彼女が押し入れを開けようとするものなら、ハラハラドキドキ、まったく生きた心地がしなかった。  
そのままバックがなくなったことに気づかれないまま、日曜が訪れた。  
彼女が仕事に行ったことを確認して、私はすぐにお金を探し始めた。  
パチンコで勝ってバックを取り返すためであるはずだが、今思うとただパチンコがしたいだけだったのかもしれない。  
タンスを開けたところ、私はキャッシュカードと生活費の入った封筒を発見した。  
現金は一万二千円しか入っていない。  
これでは焼け石に水である。

一万二千元だとパチンコをした場合、出なかったら一時間も持たない。  
キャッシュカードにしても、四桁の数字が分からなかった。  
私はさらにお金を探すことにした。  
そんな時、私は押し入れからひとつの小物入れを発見したのだ。  
その中には、彼女の指輪やネックレス、腕時計が入っていた。  
質屋に預けたとしてもいくらになるか見当もつかなかったが、私は質屋に向かった。  
予備に一万二千元も、もちろん持っていった。  
質屋に行って査定をしてもらうと、全部で六万円になった。  
これなら大きな勝負ができる。  
私は開店と同時に店内に入った。  
スロットコーナーに行き、台を確保。  
私が座った台は、お金は使うが一撃のある台だった。  
私の手持ちは約七万円、何としても勝つしかない。  
だがお金はみるみるなくなっていく。  
当たりを引いたとしても肝心のATに入らない。  
私が打っている台は、ATに入れて出玉が増えるタイプの台なのだ。  
お金がなくなっていく。  
こんなはずじゃない。  
質屋で手に入れた六万円が、残り五千円。  
残りのお金を使い果たし、予備で持ってきた封筒に入っていたお金に手を付ける。  
まったくいいところなしである。  
結果は惨敗、私は一文無しになった。  
参った。  
どうすることもできない。  
私はなんて馬鹿なんだと、自分で自分を責め始めた。  
家に帰り、まだ昼の三時、私はお金を探し始める。  
けれどもお金を見つけることは出来なかった。  
私は、引き出しの中のキャッシュカードを持って銀行のATMに向かった。  
四桁の番号がわからなかったが、彼女に関わりがありそうな数字を適当に打ち込んだ。  
三回間違えたところで、カードが使えなくなった。  
封筒の一万二千元は生活費であったため、家に彼女が帰ってきてから、そのお金はその日のうちにばれてしまった。  
私はとっさに友達に貸したと嘘をついたが、信用されていたかどうかわからない。  
数か月たち、質屋に預けたバックと小物は、利息すら入れていなかったことで流れてしまった。  
それからしばらくして、バックと小物がないことに彼女が気付いたのである。  
私を問い詰めてきたので、私は質屋に預けて利息が払えないことで流れてしまったことを正直に話した。  
彼女はビックリして泣き出してしまった。  
こんな泣き方をするのかと思うほど、激しい泣き方だった。

私はとっさに謝った。  
けれども彼女は泣き続けていた。  
私はもう一度ごめんと謝った。  
彼女は泣きながら、私を睨みつけてこう言った。  
質屋に流してしまった小物の中に、母親の形見の指輪が入っていたのだという。  
彼女の母親は、中学生の時に亡くなったと聞いたことがあった。  
彼女の泣き方を見て、それが本当のことだということが分かった。  
それがきっかけで、この日から彼女は私のことを避けるようになっていった。  
それからしばらくして、会社から帰ってきた私は唾然とすることになる。  
それは家の中の彼女の私物がなくなっていたからだ。  
そして、机の上には一通の手紙。  
手にとって読んでみると、別れの手紙だった。  
私はそれを読んだときに、申し訳ないと心から思った。  
その手紙の内容とは、彼女は私と一緒に暮らし結婚をしたかったのだという。  
けれども私とのすれ違いの日々のせいで、気持ちは徐々に離れていった。  
そして、今回の質屋のことで完全に気持ちがなくなっただけだ。  
彼女は最後に、こう書き残していた。  
私は、あなたを信用できなくなりました。  
昔のあなたはこんな人ではなかったはずですよ。  
あと、パチンコ止めなきゃだめだよ、今のあなたは完全に病気です、と書いてあった。  
彼女は私がパチンコで帰りが遅かったこと、そしてパチンコで借金をしたこと、すべて  
わかっていたのだという。  
私は彼女に対して、究極の裏切りをしてしまった。  
こんなことがおきても、私はこのパチンコというゲームを止めることができなかった。  
彼女とは、それ以来一度も会っていない。  
今思い出しても、後悔しか残らない結末だった。



## 第七章 新たなる生活

## 新たなる生活

私は、彼女が家を出て行ってから一人で生活していくことになった。  
家賃、光熱費、通信費、食費、全て自分で払っていくことになる。  
借金を抱えていたことによって、私の生活は常に支払いに追われる日々が続いた。  
そして私はある決断をすることにした。  
それは、職場を変えること。  
もう少し給料の高いところに転職しようと考えたのだ。  
次に私が選んだ仕事は、やはり前職と同じ倉庫作業員だった。  
フォークリフトを運転して、倉庫の在庫を整理する仕事だ。  
前職の友人を誘って、私はそこで働き始めた。  
時間が夜の八時から朝の五時まで、二十四時間体制の職場ということで、残業はなし、休みは日曜日、給料は手取り二十八万円である。  
前職より給料が八万円高くなったことで、私はゆとりある生活が送れると思っていた。  
けれども、現実はそんなに甘くはなかった。  
初めの頃は、お金がない、仕事に慣れてないということで、今の仕事についてから日曜日しかパチンコには行かなかった。  
けれども仕事が慣れてお金が入ると、私の生活は徐々に変わってきた。  
私が仕事から帰るのは朝六時頃、それからご飯を食べてすぐに寝る。  
朝の九時過ぎくらいには目が覚めて、そこからお風呂に入ってパチンコへ行く。  
夜働くようになった私は、昼間の時間を持て余しパチンコへ行ってしまう。  
パチンコをする私にとっては、最悪な悪循環になってしまったのだ。  
これでは、いくら給料が増えたとしてもまったく意味がない。

パチンコをするために職場を変えたようなものだ。  
パチンコ屋から職場まで約三十分、パチンコ屋を夜の七時に出ても仕事には間に合う。  
朝の十時から夜の七時までパチンコ屋にいるとしたら、九時間パチンコ屋にいたことになる。  
そうなると、私は仕事よりもパチンコ屋にいる方が長くなってしまっていたのだ。  
仕事が終わって朝家に帰ると、パチンコをしたくなり体がウズウズしてくる。  
本当はゆっくりと寝ていたいのにそれが出来ない自分がある。  
毎朝、パチンコへ行きたい衝動を抑えるのが一苦勞である。

朝起きてパチンコ屋に行き、それから仕事に直行する生活。  
職場に着く頃には、睡眠をとっていないせいで毎日体がぐったりしていた。  
お金があるときは必ず朝からパチンコ屋に行っていたが、お金がないときはひたすら我慢するしかなかった。  
イライラする、パチンコがやりたい、だが私には借金をしたくても貸してくれるところなどどこにもなかった。  
そんなある日、家に帰ったら電気がつかなかった。  
私は、公共料金を滞納していたのである。  
先月はガスが止まり、今月は電気が止まる。  
三ヶ月分の電気代、結構高くつく。  
お金がなくて支払うことができない場合、一ヶ月くらい電気が止まりっぱなしなどざらにあった。  
それにより夏場は、暑くて眠れない日々が続いた。  
ポストを開けてみると、家賃、光熱費の督促状なんていつものことである。  
市民税や、国民保険、封筒を開けて滞納金額を確認してみると愕然とさせられた。  
こんなの払えるわけがない。  
たまに昼間に誰か訪ねてくることがあったが、私は一回も玄関を開けたことがない。  
どうせ支払いの催促だと決めつけていたからだ。  
けれども支払いの中でも、家賃は滞納すると大変なことになる。  
金額が高い分、溜まると支払いが追い付かなくなる。  
そんな時はいつも親に泣きついていた。  
それを見た親は必ず私にこう言った。  
パチンコやっている訳じゃないよね。  
私は必ずやってないと嘘をつく。  
私は昔から何かあれば、いつも親を頼ってきたのではないのか？  
いったい今までにいくらくらい、親にお金を肩代わりしてもらったのかわからない。  
親が居なかったら、私はいったいどうなっていたのだろうか？  
私がパチンコを続けていられるのは、親が私の支払いを肩代わりしてくれるからなのではないのか？  
私が独り立ちしきれないのは、親が居るからなのではないのか？  
親は、私がパチンコを止めていないことをとくにわかっているはずだ。  
私が親の大切さに気が付くのは、まだまだ先の話である。

この生活を続けて五年が経とうとしていた頃、相変わらず貯金はなく、いつものように支払いに追われる生活が続くうんざりしていた時、私はある事件を起こすことになる。



## 第八章 犯罪

## 犯罪

私は、倉庫の管理もしている。

在庫管理から納品、搬出、倉庫の仕事も色々大変である。

そんなある日、搬出した品物が大量に返品されてきたのである。

私の働いている倉庫には、返品を扱っている保管所もあった。

中身は、売れ残った大量の年賀はがきである。

私は昔、友人から聞いたことがあった。

余った年賀はがきを郵便局に持っていき、切手に交換してもらえるということ。

お金がなかった私には、選択の余地はなかった。

目の前にお金に変わるものが転がっている。

私は倉庫から、返品された年賀はがきを自宅に持ち帰った。

罪悪感が私の中にでてきたが、けれども時すでに遅し、今さら戻すわけにもいかない。

夜間の仕事ということで、容易く持ち帰ることができたのだ。

それを数回繰り返し、はがきの枚数は三千枚を超えた。

その年賀はがきを郵便局に持っていき、切手に交換してもらおう。

一回で大量にひとつの郵便局に持っていくと、さすがに怪しまれると思った私は、六百枚くらいにわけて、複数の郵便局に持っていくことにした。

受付で、年賀状を切手に換えてもらえますか、と言い切手に換えてもらおう。

受付の人も、こんなにあるのですか？ と不思議がる。

そして、受付の女性が裏の方にいき上司らしき人と話し私のことを見ている。

大丈夫だろうか？

私は不安になり、その場から逃げ出したくなった。

確かに一般人で、こんなに年賀はがきが余るなんて考えづらい。

これが、三千枚のはがきだったらどうだったであろうか。

数十秒後、何とか切手に交換してもらうことが出来た。

私はその反応を見て、複数にわけて良かったと心底思った。

全て六十円切手にしてもらい、手数料を支払い、六百万の切手が私の手元に来た。

それを複数の郵便局に持っていき、三千枚の切手と交換したのである。

その三千枚の切手を、今度は金券ショップに持っていく。

一枚四十五円で換金してくれた。

手元には、十三万五千円。

私はそれを滞納していた支払いにも充てず、全てパチンコ資金に充てた。  
パチンコでお金を増やしてから支払いに充てようと考えていたが、結果お金はなくなりただのパチンコの軍資金になったのだ。  
私のしたことは完全に犯罪である。  
それから数日が経ち、はがきがなくなっていることが知られ、犯人探しが始まった。  
もちろん私にもはがきの行方を聞いてきた。  
私は知らないといい、何食わぬ顔で仕事を続けた。  
さらに数日が経ち、また私のところにはがきの行方を聞きにきたのだ。  
私は思った。  
何故何度も私のところに聞きに来るのか、その理由を訪ねたところ、私のはがきを持っていくところを見た人がいたらしいのだ。  
そういうことか、失敗した。  
数回にわけず、一気に持ち出せば良かった。  
私はそれでも、知りませんとしらを切ったが、完全に会社は私のことを疑っている。  
当然だ。  
見られていたのだから。

その後結局私は会社に居づらくなり、会社を退職することになる。  
私はその時も思った。  
また、パチンコでやってしまった。  
今更後悔しても遅かった。  
私はパチンコを止めなければいけない。  
そんなことはわかっている。  
けれども、どうしても止めることができない自分がいる。  
まったく先が見えない。  
最近、パチンコなんてこの世からなくなればいいのにといつも思っていた。  
私はいったい、パチンコでどれだけ人生を狂わせてきたのか、考えると自分が情けなくなった。  
けれども、すべて自分が悪いのだ。

会社を辞めてからしばらくして、収入がなくなったことで住んでいた場所を引き払い、私は実家に帰ることにした。  
その時、私の年齢は三十歳を超えていた。



## 第九章 パチンコ依存症

## パチンコ依存症

無職になり一ヶ月が経とうとしていた頃、前職の給料が底をついた。  
実家暮らしにもかかわらず、相変わらずパチンコは止められない。  
朝からパチンコ屋に入り浸りである。  
今月は十五万負け、このお金がなくなったらどうしようか、私はよくこんな想像をするようになっていた。  
パチンコ屋の帰り道、絶望を感じながら辺りを見渡す。  
このビルから落ちたら死ぬか？  
この木なら首吊りできるか？  
そんなことばかり考えるようになっていた。  
考えるだけで、実行に移せない私がそこにいるが、それを考えると私は少し落ち着くのだ。

仕事を探さなければ、お金がない。  
これ以上、親に頼ることもできない。  
けれども、どうしてもやる気がでない。  
それでも、私はお金を作るために仕事を探すしかなかった。  
何の仕事をしようか？  
何気なく新聞の広告を見ていると、ドライバーの募集が乗っていた。  
最近、うちの親の車を運転することが増えたこともあり私はドライバーに興味を持ったのだ。  
ダメもとで電話をかけてみる。  
すると何とか、面接をしてもらえることになった。  
未経験だが、人手が足りないのか、明日から見習いとして雇っていただけらしい。  
明日からきて。  
私は、ありがとうございますと、丁寧に頭を下げた。  
明日、朝四時に来てくださいということだ。  
私は内心、嘘だろと思ったけれど、私は働くしかない。  
わかりましたといい、事務所を後にした。  
朝三時半に家を出て真っ暗闇の中、親の車で待ち合わせ場所に行った。

待ち合わせ場所に着くと、年配の人が私のことを待っていてくれた。  
おはようございます。今日からよろしくお願ひしますと言ひ、私はすぐに助手席へ座った。  
仕事内容は、朝ここから二時間先の倉庫で荷物を積んで、十件ほどお客様のところに回る。  
終わったら、また事務所に帰ってきて終了らしい。  
荷物は重たいものがほとんどで、それを台車に乗せて納品をする。  
十件ほど回り、事務所へ。  
帰りは夕方四時くらいになっていた。  
今日は助手席だったが、まさかこんなにドライバーが疲れるなんて思いも寄らなかった。  
この仕事を、私は一人でできるのだろうか？  
私は完全にドライバーをなめていたのだ。  
疲れはてた私はそのまま家に直行する。  
ご飯を食べて、直ぐに就寝した。  
次の日も四時に待ち合わせ。  
尋常じゃないくらい眠い。  
今日は、朝から私が運転することになっていた。  
運転席に座り、ハンドルを握ったところまでは良かったが、直ぐにエンストを起こす。  
ギアを二速、三速と変えようやく走り出す。  
マニュアルは教習所以来であるが、何とか運転できた。  
さっきまでの眠気が嘘のようになくなった。  
そのまま倉庫に行き、積み込み開始。  
伝票を見ながら、慎重に積んでいく。  
そして配送先へ向かい、積み荷を降ろす。  
事務所に戻り、帰宅。  
また朝四時に待ち合わせ、それを三週間繰り返しようやく独り立ちである。  
私はこの三週間、お金がないこともありパチンコはできなかった。  
私はこのままパチンコを止めることができるのではないか、それともお金が入ったらパチンコへ行ってしまうのか、私にはわからなかった。  
仕事も一か月が過ぎ最初の給料日、だが私はそのまま家に帰った。  
体が疲れて、早く家に帰って寝たかったのである。  
とてもパチンコに行ける元気はない。  
そして次の日も、また次の日も私は仕事が終わりに、家に帰って食事をして寝た。  
けれども明日は日曜日、仕事が休みの日である。  
私はその日の朝から、今日はパチンコに行く気になっていたのである。  
体は疲れている、けれどもパチンコへ行きたい。  
閉店までパチンコをしても、明日はゆっくり眠ることが出来る。  
誰も今の私を止められないだろう。  
私は仕事が終わりに、急いでパチンコ屋に向かった。  
結果は、少しプラスだった。

日曜日ゆっくり寝るはずだったが、結局私は朝からパチンコ屋に並んでいた。  
パチンコ屋に行きたくて、ゆっくり寝ていられなかったのだ。  
結果は大敗、いくら負けたか、計算もしたくないくらい負けたのである。  
悔しい、久しぶりに味わう感情だった。  
この店は、遠隔をしているに違いない。  
こんな店、二度と来るかなど負け惜しみを言う。  
そして自分をいつものように責めた。  
昔からこの繰り返しである。  
次の日、朝四時に会社へ行き仕事をこなす。  
疲れているけれど、昨日の負けが悔しくて帰りにパチンコ屋に直行した。  
閉店まで打って、朝四時に出勤。  
眠さを抑えて、仕事をこなす。  
会社帰りにパチンコ屋に直行する。  
いつの間にか、これが当たり前の生活になってしまった。  
結局、私は元に戻ってしまったのだ。  
私はお金が続く限り、この生活を繰り返してしまうのだ。  
お金がなくなると、仕事が終わるそのまま家に帰る。  
けれど、土曜日は家に帰ると、体がウズウズし始める。  
明日が休みだからだ。  
私はお金がないか、質屋に預けられるものはないか、家の中を探し始める。  
私は、パチンコを止められない意志の弱い自分が大嫌いだった。  
本当だったら、家の中でお金を探すこともしたくない、けれども自分をどうしても抑えきれない。  
何度パチンコを止めようとしても繰り返してしまう。  
いったいどうすればいいのかわからなかった。

家の中を探していると、引き出しの中からお金の入った封筒を見つけた。  
中身は、十万円。  
私は、それを持ってパチンコ屋へ向かう。  
私は知っていた。  
今まで家から持ち出したお金で、パチンコをして勝ったためしがないと。  
けれども、自分を抑えきれない。  
パチンコは勝てないようにできている。  
そんなことは知っている。  
けれども、私は早くパチンコで刺激を味わいたいのだ。

結果は、二万負け。  
私は高校生の頃と比べ、全然成長していないではないか。  
いつものように、できもしない自殺願望の妄想をしながら自宅に帰る。  
家に帰ると、すぐに親に問い詰められた。

あまりにもガミガミ言われたことで、私も藁をもすがる思いで、パチンコがどうしても止められないと親に話した。

それを聞いて、親はこう言った。

パチンコなんてやめなさい約束したでしょ、何であんたはそんなに意志が弱いのと私に言ってきた。

私はそれを聞いて、やっぱりなあと思った。

所詮親は私の気持ちなんて理解できない。

言わなければよかった。

今なら、親戚の叔父の気持ちがよくわかる。

多分叔父も同じ気持ちなのだろう。

私は、薄々は気が付いていた。

私はもうずいぶん前から、病気にかかっているのではないかと。

パチンコを止めたくても止められない病気。

それが、パチンコ依存症という病気である。

自分はパチンコを止めたい、けれどもその病気が、私をパチンコから引き離してくれないのだ。

だから、何度でも同じことを繰り返す。

私の意志では、パチンコをやってはいけないと思っている、けれども私の意志以上にパチンコの誘惑が強い。

これは、同じように悩んだ人しか絶対にわからない病気である。

働き出して二年が経ち、自殺までの道のりが日に日に近づいていく。



## 第十章 止まったままの成長

## 止まったままの成長

私はずっと変わらない。

周りはどんどん先へ進んでいくのに、私の人間としての成長は止まったままである。

けれども、時間だけは常に流れている。

最近パチンコへ行くと、いつもイライラしながら打っている気がする。

いつも誰かを妬んで羨んで、パチンコに填まると性格が悪くなる。

お金がかかると、素面ではいられなくなる。

私の性格は、たぶん普通の人より歪んでしまったのだろう。

今日も仕事が終わりに、パチンコに行ってしまう。

ここ二年お金があると、必ずパチンコに行ってしまうようになっていた。

いったいこの二年間で、いくらお金を失ってきたのであろうか？

でも、それはしょうがないことだ。

パチンコが好きなのだから、自分を抑えきれないのだから、そして病気のだから。

私はいったい何のために働いているのだろう。

多分、パチンコをするためなのだろう。

夜中、家を出て帰りが夕方になる。

それからパチンコへ行く。

寝るのが夜の十一時、毎日眠い。

私は馬鹿なのか。

パチンコで負けた次の日も、勝った次の日も、この繰り返しになる。

最近、パチンコの調子がいい。

けれども結局は何も買わずに、またパチンコの軍資金になるだけで、私の生活は何も変わることはない。

友達が結婚した、私はパチンコへ行く。

友達に子どもが出来た、私はパチンコへ行く。

友達が家を買った、私はパチンコへ行く。

友達が出世した、私はパチンコへ行く。

他の人は着実に前に進む、けれども私は立ち止まったまま。

この差はいったい何なのだ。

多分、パチンコをやっているせいなのであろう。

今月も、パチンコに負けてお金がなくなった。

さっきまで数万円あったのに、来月までまた貧乏生活である。  
一日二百円くらいしか使えない。  
節約、節約。煙草代は親から借りるしかない。  
仕事から帰る。  
パチンコを我慢する。  
仕事から帰る。  
パチンコへ行きたいが、お金がない。  
イライラ、イライラ。家の中を探し始める。  
最近はお金が一切おいていない。  
当然である。  
私が探してお金を持っていってしまうから。  
イライラ、イライラ、イライラが治まらない。  
パチンコが頭から離れない。  
そんな時、もしかしたらという言葉が私の頭の中に浮かんだ。  
それは、もしかしたら消費者金融から借りられるかもという言葉である。  
私は前に債務整理をしていた。  
返済して五年が経過していないだろうか？  
五年が経過していたのならお金を借りることができると、聞いたことがある。  
私は消費者金融に電話をしてみたのである。  
なんと審査が通り、借りることができるらしい。  
私のテンションが一気に上がる。  
すぐに無人契約機に車を走らせる。  
三十分後、私は三十万円の限度額で十万円を手にした。  
私は、その足でパチンコへ行く。  
さっきまでのイライラが嘘のように消える、まるでパチンコという薬のようだ。  
アルコール中毒の人にお酒を与えるのと同じような感じなのだろう。  
薬物を切らしてイライラが止まらない人に、薬物を与えることと同じなのだろう。  
私にとっては、パチンコは薬なのだ。  
軍資金があるせいで、最初から大きな勝負に出る。  
結果は負けである。  
悔しいけれども、お金はまだある。  
明日もパチンコへ行ける。  
この、明日もパチンコへ行けると思うことで次の日の励みになる。  
この時になるとパチンコでの勝ち負けよりも、明日もパチンコへ行けるかどうかは私の  
中では重要であった。  
仕事が終わる、急いでパチンコへ。  
結果、二ヶ月もしないうちに限度額いっぱいまで借りてしまう。  
すべて使い切ると、私はさらに他で借りようとする。  
一年もしないうちに、借金二百万円の出来上がりである。  
毎月毎月、返済の繰り返しになる。

その借金を私は何年かけて返済していくのか、パチンコ依存症とは常に同じことを繰り返す。

何度でも、何度でも呆れるくらい。

原因はわかっている。

すべてにおいてパチンコを優先してしまうから。

多分、私は一生涯この生活から抜け出せないだろう。

## 第十一章 刺激を求めて

## 刺激を求めて

人は、私を駄目な人間だと言うだろう。  
その通りだ、私は駄目な人間だ。  
人は、私を意志の弱い人間だと言うだろう。  
その通りだ、私は意志の弱い人間だ。  
また、お金をすべて擦ってしまった。  
もうパチンコを止めよう。  
けれども、お金が入るとパチンコへ行ってしまう。  
結局、また同じことを繰り返す。  
もううんざりである。  
戻れるものなら戻りたい、高校生の時に。  
そしたら絶対にパチンコはやっていない。  
勉強をして、進学をしているはずだ。  
普通に結婚をして、子どもを作って、家を買って、車を買う。  
それが当たり前のように出来ていたはずだ。  
振り返ると、後悔しかない。  
今の私には先が見えない。  
例えるなら、私は真っ暗闇のトンネルの中にいる。  
そこからどうしても、抜け出すことができない。  
出口はすぐ目の前なのに。  
出口から抜け出そうとすると、また引き戻されてしまう。  
真っ暗なトンネルにいったい何があるというのか？  
それは刺激である。  
刺激のせいで私は病気になる、そこから引き戻されてしまう。  
明日は給料日、借金の返済に行く日である。  
そのあと、いつものようにパチンコに行く。  
また明日、私は急いでパチンコに行くのであろう。  
そして、お金をすべて失ってしまうのだろう。  
そして自分を責める、そして後悔する。  
本当に、うんざりである。  
私にとってパチンコはたんなる刺激である。

お金をかけて、大当たりを引いたときのホッとした瞬間を求めて、私はパチンコをしている。

私は作られた刺激を求めて、パチンコをしていることになる。

その為にお金を使う、そして時間を使う。

私にとってパチンコは勝ち負けではなくなってしまう。

もし勝ち負けだったとしたら、私はパチンコをしていなかったのではないか？

だって、パチンコは必ず長い目で見たら負けるゲームなのだから。

それを考えると、私はパチンコをしている理由は刺激になるのである。

その刺激欲しさに、お金を失うからとてつもない後悔をする。

私は、作られた刺激をお金で買っているにすぎない。

私は刺激に飢えている。

それがパチンコ依存症の原因なのである。

それじゃあ、パチンコをやらない人は私の苦しみを理解できるわけがない。

これが、答えなのである。

本来刺激を得るのは、そんなに簡単ではない。

普通に生活をしていて、そう簡単に刺激を味わうことは出来ない。

刺激とは、自分を磨いて何かチャレンジして、その達成感が刺激につながる。

自分を興奮させるのだ。

すなわち刺激とは、自分を成長させるものはずではないのか？

人は皆、刺激を味わうために生きているのではないのか？

けれども、パチンコはそうではない。

簡単に自分を興奮させるのだ。

これを繰り返したらいったいどうなってしまうのか？

刺激のない現実世界がつまらなく感じてしまうのではないのか？

私は、刺激のない毎日がつまらない。

だからパチンコへ行く。

だから刺激があるパチンコで病気になってしまう。

今の私ならすべてわかる。

簡単に得ることができる刺激は、人を狂わせるだけである。

刺激をお金で買えるなら、別にパチンコじゃなくてもいいということ。

スマホアプリのガチャも簡単に刺激を味わえる。

賭け麻雀、賭けボーリング、賭け花札、これでお金がかかっていなかったら、燃えないであろう。

何かをかけるから燃える。

すべてギャンブルになる。

だから病気になってしまう。

だから填まると借金をしてしまう。

この時の私は、まだパチンコのからくりをそこまで理解できていなかったのである。

私の最大の敵は、本当はパチンコではなく刺激ではないかと今の私なら思う。



## 第十二章 やる気

## やる気

今月も給料をもらったら支払いに行かなければいけない。  
消費者金融だけではなく会社の同僚にも返さなくては、それから給料を前借りした分会社の給料が少ない。  
私は、会社、同僚からお金を借りていたのだ。  
また今月も会社から前借りしなければいけないのだろう。  
そして支払いが済んだら、パチンコへ行くのだ。  
相変わらず、パチンコへ行く前はテンションが高くなる。  
パチンコまでの道のりはいつも最短コース、寄り道もしない。  
パチンコから帰るときは、いつもテンションが低くなる。  
パチンコでテンションを上げた分、その反動で帰りはテンションが下がる。  
明日も仕事だ、行きたくない。  
出来ることならゆっくり寝ていたい。  
最近、そればかりである。  
最近は何故か寝つきが悪い。  
今日も四時間くらいしか寝られないだろう。  
一睡もできない時もあるくらいだ。  
仕事に集中できない。  
帰って早く寝たいけれど、パチンコへ行ってしまう私がいる。  
疲れるわけである。  
朝、目覚めても眠さが全然取れない。  
体はだるい、やる気も出ない。  
けれども、早くパチンコへ行きたい。  
そんなことを思いながら、私は仕事をしている。

それからしばらくして、私は工作中人身事故を起こしてしまったのである。  
早く仕事を終わらせて、パチンコに行きたいがために、黄色から赤に変わる信号を突っ込んでしまい、右折で曲がろうとしていたバイクをはねてしまった。  
すぐに車を止め、バイクのところに走っていった。  
血だらけで、相手に意識はない。  
私の頭の中は真っ白になり、気が動転してしまった。

近くにいた人がそれを見て、すぐに救急車を呼んでくれた。  
しばらくして、救急車が到着してタンカーに乗せ病院に向かった。  
私は警察と事故検分に入った。  
私は大変なことをしてしまったと後悔した。  
相手に意識はない、それを見て私はバイクの女性は死んでしまったのではないかと思っていたが、バイクを運転する女性は足の骨を折る重傷ではあったが、命に別状はないらしい。  
死んでなかったんだ、本当に良かった。  
数日後、病院にお見舞いに行った。  
私は、相手に心の底から申し訳ないと頭を下げた。  
相手は、軽くうなずいただけだ。  
私は、相手に交通事故という怖い体験、そして恐怖を与えてしまった。  
本当に申し訳ないことをしたと思っている。

もちろん人身事故を起こした私には、しばらくしてから免許停止処分があった。  
免停三ヶ月、そして給料から事故代として五万円引かれることになる。  
免許センターに行き、短縮してもらうため数日間講習を受ける。  
それが終わると、あと私は家にいるだけである。  
会社もしばらく休むしかない、収入が底をついてしまうがそれはしょうがないことだ。  
パチンコなんてできやしない。  
借金が滞ることになると思うが、もうどうでもいいやと投げやりな気持ちになった。  
なんだか疲れた。  
全くやる気がでない。  
私は、バスでパチンコへ行くことにした。  
私の使えるお金は十万円、私を満足させてくれるだろうか？  
今日は少し勝った。  
今日は少し負けてしまった、の繰り返し。  
勝ったり負けたりを繰り返しながら、結局私のお金は底をつきることになる。  
明日から、煙草を買うお金もない、食事するお金もない。  
来月はお金も入らない、借金も返せない。  
もう、どうすることもできない。  
私には先が全く見えなかった。  
お金もなく、家でじっとしていることしかできなかったが、数日で私のイライラが限界になる。  
私は手当たり次第、金融屋に連絡をしてみることにした。  
審査をして断られ、審査をして断られ、聞いたことのないような金融屋にも連絡をしてみるが借りている額と件数だけで門前払いである。  
やっぱりどこも無理か。  
そんな時、審査途中の金融屋から連絡が入った。  
十万円なら融資できますという電話だったのだ。

はい、それではお願いします。と伝え貸し付け内容を確認した。  
それが七万円貸して、十日後に十万円にして返す約束ができれば、すぐにでも銀行に振り込むというのだ。  
なんだそれは、十日で四割以上の利息ではないか。  
そして信用がつけば、大幅に利息を減らすというのだ。  
私に貸してくれるところはもうどこにもない、借りるしかないのか、私はそう思い借りることにした。  
私の頭の中は、完全にマヒしていたのだろう。  
収入もないのに十日後に十万円にして返せる訳もない、普通に考えればわかることである。  
そのお金で私は何をするのか？  
もちろんパチンコである。  
私はパチンコに狂っているのである。  
私はパチンコにしかお金を使うすべを知らない。  
まさに、病気である。  
数回行ったパチンコで、結局全てのお金は失った。

## 第十三章 自殺

## 自殺

十日後、私は例の金融屋に電話をした。  
利息だけ入れてくれればジャンプさせてくれるらしい。  
それが無理なら、十日後に十五万にして返せばいいとの話である。  
私は十五万を返すと約束したが、返せるあてなんてあるはずがない。  
また十日後に、私は電話をした。  
いつもとはまったく口調が異なり、乱暴な話し方だった。  
電話先で怒鳴り散らしているのだ。  
そして次は必ず返済しろとの話である。  
もし返済できなければ、私の会社、家に取り立てに行くというのだ。  
今度は、十日後には二十五万に増えていた。  
一か月前に借りた七万円が二十五万円に、三倍以上になってしまった。  
まずい、けれどもどうすることもできない。  
返済できなければ、会社も首になるだろう。  
友達にも相談できない。  
親にも相談できない。  
でも、もういいや。  
私は何もかも嫌になっていた。  
パチンコを止められない自分、借金がある自分、すべてが嫌だった。  
私は心底疲れた。  
もう何も考えたくない。  
死にたい。  
死んで楽になりたい。  
私はそればかり考えるようになっていた。  
次の返済日、自殺しよう。

返済当日、親の睡眠薬をポケットに入れ、私は携帯の電源を切った。  
そしてなけなしのお金を握りしめ、免停中にもかかわらず親の車に乗り込んだのだ。  
私はホームセンターに向かったのである。  
ホームセンターに向かい、私が購入したのは七輪とビニールテープと練炭と水だった。  
私は練炭自殺をしようと考えた。  
私が向かった先は、人気のない竹藪だった。

前にも一度来たことがあり、そこは後悔の念に駆られ、一人になりたくてこの場所を発見したのである。

練炭を袋から出し、七輪に設置。

それから窓に目張りを始めた。

これでもう、いつでも死ぬことは出来る。

あとは火をつけるだけにした状態で、私は過去を振り返った。

何故、自分はこんな風になってしまったのか？

高校時代からいつを振り返ってみても、仕事以外パチンコをしていた気がする。

どこかに旅行に行った記憶もない。

何故、こんな人生になってしまったのか？

後悔以外何もない。

本当に疲れた。

もう生きるのに疲れた。

結局私には何も残せなかった。

こんな糞みたいな人生、ようやく終われる。

疲れた。

色々な人に迷惑をかけてきた。

とくに親や彼女に。

彼女は今何をしているのだろうか？

でもどうでもいいか。

死んだらどうになってしまうのか？

それもどうでもいいか。

死ぬ前に遺書を書いた方がいいかな。

まあいいや、紙もペンもないし。

これで、ようやくパチンコを止めることができる。

本当に苦しかった。

私は大量の睡眠薬を飲み、練炭に火をつけた。

それからしばらくして、意識がなくなった。



## 第十四章 抜け出せないトンネル

## 抜け出せないトンネル

あれ、ここはどこだ？  
気持ち悪い、すごく不快な気分だ。  
これで本来なら死んだはずだったが、気がついたら何故か病院のベッドの上になっていたの  
あった。  
私は助かってしまったのか？ 何故だ？  
誰かに助けられたのか？  
しばらくして、親が私のところに来た。  
私の顔を見ると、いきなり何しているのと怒り出した。  
私は何も言えなかった。  
あなた、死ぬところだったのよ。  
親は泣き出した。  
私が何で助かったか聞いてみたところ、そしたら近所の人がたまたま見つけて通報した  
ということらしい。  
発見されたときは、私の意識はなかったが処置が早かったのだろう。  
そのまま、救急車を呼んで病院に搬送されたそうだ。  
私は助かったことで、問答無用で現実に戻されることになる。  
借金の電話なかったか、私は親に聞いた。  
電話あったわよ、でも払ったから。  
あなたこんなことで自殺なんてしないでよ。  
私はゴメンと言った。  
けれども、私にとってはこんなことなんかではない。  
そこまで私は追い詰められていたのである。  
それより、私自身これ以上生きていたくなかった。  
私は助かったことで、嬉しいという気持ちは浮かばなかった。  
その日は、そのまま入院となったことで私はいろいろ考えることになる。  
私はなんのために生き残ってしまったのか？  
生きていたくない半面、生きていたいという気持ちも少しはある。  
どっちなのだろう。  
次の日、私は退院することになった。  
親の勧めで、私は精神科に行くことにした。

そこで診断されたのは、双極性障害だった。  
鬱の状態と躁の状態が合わさった障害らしい。  
私の場合はパチンコをする前から躁状態に入り、それ以外は鬱気味になっている。  
パチンコをやり自分を責め続けた結果、この病気を発症してしまったのだと私は思っている。  
私はパチンコ依存症になって、さらに双極性障害までも引き起こしてしまった。  
これがパチンコ依存症なのだ。  
これがパチンコ依存症になった末路なのである。  
パチンコ依存症になると、他の病気までも引き起こしてしまう。  
その病気が家族まで不幸にしてしまう。

しばらくして、私の免許が戻ってきたことで仕事に復帰した。  
私は会社にも迷惑をかけた。  
お金がなかったのと、今回のことで私は今までにないくらいの気持ちでパチンコを止めようと決意した。  
給料が入り、いつもの私ならパチンコへ行ってしまっていたが、私はパチンコを止めたのである。  
だから、私は行かない。  
不思議とこの時の私は、自分を制御できた。  
もう二度とパチンコはしない。  
絶対にしない。  
しかし、またいつものイライラが襲ってくるようになる。  
パチンコを止めようとする決まると、このイライラが私の邪魔をし始めるのだ。  
離脱症状である。  
どうしても、この誘惑には勝てない。  
明日は日曜日。  
パチンコのことが頭から離れない。  
自分ではどうすることもできないのだ。  
パチンコに行きたくないという意志は存在するが、その意志はパチンコの前では通用しない。  
私は自殺未遂までして、結局またパチンコに行ってしまうことになる。  
やっぱり死ななければ治らないのか？  
パチンコの帰りに、私はまたいつものように自分を責め始める。  
そして次の日も、朝からパチンコへ行く。  
私の生活は、結局何一つ変わらないのだ。

それから十年の月日がたった。  
今の私は、九年近くパチンコをやっていない。  
あれだけ苦しんだパチンコを、私はやっていないのだ。  
自殺未遂までしても止めることができなかったパチンコを、私は止めているのだ。

私は、パチンコ依存症を克服したと言えるのではないだろうか？  
あれだけ苦しんでいた私に、いったい何が起きたのか？

## 最終章 パチンコ依存症克服

## パチンコ依存症克服

私は、自殺未遂までしても止めることができなかったパチンコで苦しんでいた。けれども、パチンコを止めている。何故そんな私がパチンコを止めることができたのか？それは、単純なことだったのである。私はパチンコと徹底的に向き合った。結果、最初にまず私は何故パチンコを止められないのかを考えた。それは、お金があるからだということ。私がお金を持つとストレスを感じてパチンコへ行きたくなくなってしまふ。当然である。パチンコはお金があればできてしまふ。だから私は、お金を持たないようにしようと考えた。パチンコが出来ないことがストレスなのではなくて、お金を持っていること自体がストレスだと私は気が付いたのである。皆さんも考えてみれば、それに気づくと思います。ならどうすればいいか？お金を身近な人に預けることである。そして毎日常生活費をもらうようにする。一日千円以下が理想だ。それができなかつたら、三日に一回、週に一回、お金をもらうか、振り込んでもらうようにする。それ以外は絶対に渡さないようにしてもらふ。要するに、お金を自分で管理してはいけないのである。その次に、時間を持て余さないように考える。時間があれば、パチンコに行きたくなくなってしまうからである。なら趣味を探せばいい、けれどもそんな簡単に趣味を見つけられないのが普通。というよりは、趣味ではなく、自分にとって刺激になるものを探すのである。パチンコの誘惑は、はっきり言って大当たりしたときのホッとした瞬間が刺激になるのである。だからパチンコに変わる刺激を探さなければいけない。私の場合、しばらく自転車で仕事に通った。

自転車も慣れていないものすごく疲れるが、私にとってはいい刺激になった。  
自転車は、健康にも体力づくりにもなる。  
それが無理なら、お金を追う刺激を身につけることである。  
新たなる副業を探す。  
それがバイトでもなんでもいい。  
お金は追うためにあるもの、パチンコはお金を失うためにあるもの、そこをきっちりわ  
からなければいけない。  
お金を得ることは、最高の刺激につながるのである。  
それから、日記や家計簿も必ず書くようにすること。  
これを行うことによって、金銭感覚が徐々に回復していく。  
パチンコ依存症になってしまうと、とにかくやる気が起きなくなる。  
向上心をなくすのだ。  
自分を奮い立たせてやる気を起こさせる。  
あとは、とにかく自分を見つめ直す。  
自分を見つめ直すことによって見えてくるものが必ず出てくる。  
それが失ったものだ。  
お金であり、時間であり、信用、信頼、金銭感覚、色々出てくる。  
パチンコを止め、自分に返ってくるものを考える。  
パチンコで使う予定のお金が返ってくる。  
嘘をつかない自分が返ってくる。  
そして、信用、信頼、金銭感覚、全てパチンコを止めることによって返ってくる。  
パチンコを我慢して止めようとしてはいけない。  
人は何かを我慢して止めようとすると、それが必ずストレスになってしまう。  
パチンコを止めるためには、我慢ではなく、理解して止めなければいけない。  
どんなにパチンコを止めようと心に誓ったとしても、パチンコ依存症は同じことを必ず  
繰り返す病気である。  
だから、行動に移してやめなければいけないのである。  
私には、それがずっとできなかった。  
だから苦しんだ。  
行動に移してから私は、パチンコを一ヶ月止めた。  
私にもパチンコを止められるのかと少し自信がついた。  
それが二ヶ月、三ヶ月と続くと、さらに自信がついた。  
それが一年経過すると、自信が確信に変わってくる。  
私は、パチンコが今でも大好きだ。  
私はパチンコの恐ろしさを、身を持って体験したことにより、私はパチンコには向いて  
いないということが分かった。  
昔の自分には二度と戻りたくない。  
私は、この先ずっとパチンコ依存症である。  
私がパチンコを止めて九年。  
私はいろんなものを手に入れた。

家であり、車であり、妻であり、子どもであり、信用であり、信頼であり、お金であり、時間であり、そしてやる気である。

パチンコを止めていなかったら、決して手に入れてはいなかっただろう。

これを読んでいるあなたは、ひょっとしたらパチンコ依存症の病気で苦しんでいるのかもしれない。

けれども、私はここで断言する。

パチンコ依存症は必ず克服できる。

私はパチンコ依存症になったことで、パチンコ依存症と徹底的に向き合った。

パチンコ依存症とは、向き合わなければ克服できないものである。

それを忘れないでほしい。

この物語は、私を含め数人を掛け合わせた事実に基づいて書いたものである。

ご愛読、どうもありがとうございました。



---

自殺にたどり着くまでの道のり      パチンコ依存症克服

---

著      吉田 そら

制 作   Puboo  
発行所   デザインエッグ株式会社

---